

選択課題2 文学は社会の役に立つか

「文学は社会の役に立つか」と問う社会を問う

稲垣早佑梨いながき せうり(愛知県／聖霊高等学校二年)

はじめに——文学は社会の役に立つか——

「文学は社会の役に立つか」——この問いに、私は大きな衝撃を受けた。なぜなら、文学を読むことによって様々な悩みに対する解決や、慰めを得てきた私にとって、文学は必要不可欠なものであり、「役に立つもの」かどうかと考えたこともなかったからだ。文学を読むことによって得られたものを自分の人生において「役に立った」と見ることもできるかもしれないが、そもそも利益を求めて文学と向き合うのはおかしい、という思いが先行してしまう。「文学は社会の役に立つか」という問いが成立するためには、「文学は社会の役に立たないのではないか」そして、「役に立たない

ものは存在しなくても良いのではないか」という意識が社会の中で一定の力を持っていることが前提となる。確かに、今の社会ではそうした考えを許容する雰囲気が出てきているように感じる。その中で抱いていた漠然とした不安が、この問いという形をもってはつきりと私の前に現れたのである。

この問いを目にしたとき、私は二年前に相模原で起きた、福祉施設が襲われた事件を思い出した。犯人は、障がいを抱えた人々をまさに「役に立たない」と考え殺害した。今年もまた、国会議員という立場にある人が、ある一定の人々について「生産性が低い」と寄稿したことが大きな問題となった。もちろん、こうした言動は非難を浴びたわ

けだが、その背景には彼らの主張に同調する人が少なからず存在することがあるのではないかと感じる。その理由の一つが、今私自身が高校生として自らの進路と向き合う中で感じる、「役に立つ」ことを学んですぐに活躍できる「即戦力」¹⁾「役に立つ」人間になることを求める社会的な圧力である。大げさに聞こえるかもしれないが、私は日々「役に立たない人間、利益を出さない人間に価値はない」と言われ続けているように感じることもある。もちろん、誰もが「自分はそんなことを言っていない」というだろうが、「社会の役に立つ人間になりなさい」という常套句は、それを体よく置き換えたものに過ぎないのではないだろうか。「役に立たない」ものは不要だという考え方は、単なる考え方にとどまらず、今日の日本の社会に蔓延しつつある、大学でいわゆる「実学」を学ぶことを重視する動きに繋がっている。そうした動きの中で、実際に立場のある人々の口から文学部のような「役に立たない」学部を不要とみなす発言すら聞かれるようになった。

率直に言えば、私は「文学は社会の役に立つのか」という問いは真剣に答えるに値しないものだと思うている。文学の価値は、

人間自体のそれと同じくらい論証が不要なものだと信じるからだ。しかし、今私たちが生きている社会が、人間までも「役に立つ」かどうかでその価値を決めかねないようなものになるうとしているのだとしたら、ここであえてこの問いに真剣に答えておくのではなくてはならないと思い、このテーマを選んだ。

「役に立つ」とはどういうことか

「役に立つ」とは、非常に広い捉え方のできる言葉であり、その解釈を広げれば文学がいかに社会の役に立つか、苦しい文学弁護を展開することは容易である。しかし、ここでそんなことを論じるつもりは毛頭ない。それをしてしまつては、「役に立たない」ものの存在を認めようとしなさい、今の社会が持つつつある価値観を受け入れることになるからだ。「文学は社会の役に立つか」と問う時、そこには、社会に利益をもたらす実用性があるかどうか、言い換えれば、それでお金を稼いだり、何か有用な道具を作つたりできるのかという冷ややかな視線がある。しかし、そうした即効性や実用性を偏重する姿勢こそ、問い直されるべきではないだろうか。

私たちは、古いものよりも新しいものの方が常に優れており、「役に立つ」と考える傾向があるように思う。例えば、私たちは数か月おきに新しい携帯電話が発売され、より新しいモデルに置き換えられるのを目の当たりにしている。つい昨年まで声高に宣伝されていた「最新型」は瞬く間に流行遅れになる。かつては「役に立つ」とされたものが「役に立たない」ものへと変化する様子を、私たちは即効性と実用性の世界の中で常に目にしている。対して文学はそうではない。古い作品であつても、優れた作品は版を重ねて何度も出版され、新しい作品が出版されたからといって捨て去られることはない。文学作品の存在価値は、「役に立つ」か「役に立たない」かでは測りようがないのだ。そしてその価値の根柢は、人間の命の価値と同じように、「人間が人間であること」自体の中にあると思われるのである。そこで、人間にとって文学とはどのようなものなのかということをも、論じてみたいと思う。

「はじめに言葉があつた」

広い意味での文学とは何であるかを一言で表すと、「言葉の芸術」といえるのでは

ないだろうか。広辞苑は文学を「言語によつて人間の外界及び内界を表現する芸術作品」と定義している。そこで、文学の基礎をなす「言葉」がどういった特徴を持つのかを考えてみたい。人間は、少なくとも既知の生物の中で唯一複雑な文法を持った言語を使いこなし、思考の及ぶところの大部分をそれによつて表現することができ生物である。「言葉」が人間の本質に関わる営為であることは、古くから指摘されてきた。もちろん、音声信号をコミュニケーションの手段として使用する生物は人間だけではない。イルカ、鳥、更には昆虫までもが、そうしたコミュニケーション手段を持つている。しかし人間と他の動物が使用する音声信号には決定的な違いがある。それは、人間の言葉には他の動物は持ち合わせない抽象的な概念があるということだ。古橋信孝は著書『文学はなぜ必要か』の中で、「人間は言葉を持つようになった途端に観念を持つようになった。これは、言葉から物事を考えるようになったことを意味している」(注1)と述べている。ここに書かれている通り、言葉は単なる情報伝達の手段ではなく、それ自体が人間の複雑で抽象的な思考を可能にするものである。

それこそ、現代社会で「役に立つ」ともてはやされる学問も、言葉がなければ全て存在しえない。古代のギリシア人はこのことをよく知っており、人間を「ロゴス」的存在と捉えていた。ギリシア語の「ロゴス」は、本来は人々の話す「言葉」を意味する単語であるが、より広く概念、意味、論理、思想、言語、理性などの訳があてられる。要するに、言語によって表現されるような人間の理性の営みが、「ロゴス」なのである。現在の諸学問は西洋のものをモデルにしており、科学も、もとをたどれば万物の根源を追求しようとした古代ギリシアの自然哲学に遡る。言葉を用いて合理的に世界を説明しようとする自然哲学から科学が生まれ、言葉を用いて世界を表現しようとする神話から文学が生まれた。新約聖書「ヨハネによる福音書」は「はじめに言葉(ロゴス)があった」という有名な言葉で始まる。西洋の学問は、人間をロゴスの存在として捉えることにその基礎を置いている。言葉の芸術である文学の価値も、そこから考えることができるのではないだろうか。

上述のように、言葉は人間が人間であるために必要不可欠な、人間の本質と切り離せないものである。言葉は特定の音と意味とを結合することによって成立しているが、一部の擬音語を除いて音と意味の関係に絶対的な根拠はない。例えば同じ「アイ」という発音であっても、日本語では「愛」となり、英語では「eye」になる。言葉というものは存在自体は確固としたものでありながら、その意味はそれを話す社会が共通の理解をすることによって辛うじて成り立つ不安定なものである。その不安定な関係を確かなものにしてきたのは、人間が社会の中で言葉を使い続けてきた歴史であった。人間と言葉は密接に結びついており、社会もまた言葉によって結びつき、言葉は社会の中でその存在を確かなものにしてきた。言い換えれば、人間と言葉は社会という場の中で相互に依存し合うことで存在している。

また、人間にとつての言葉は単なる音と意味の体系に留まらず、「言霊」という言葉にあるように、その言葉を発する人の心を伝える役割を担っている。吉本隆明が「言語にとつて美とは何か」の中で、すべての言葉にはふつう意味と言っているものに加えて、発話者の心が表現されているという趣旨のことを述べているのは、そういう意味であろう。「言霊」の力は、歴史を動かす原動力でもあった。例えばキング牧師の「I have a dream」という言葉がアメリカの人種差別を終わらせるだけの力を持ったように、世界を敵と味方に分けたヒトラーの演説がドイツの人々を狂気に駆り立てるだけの力を持ってしまったように、世界の歴史が大きく動いた時、その背後には必ず「言霊」が宿った誰かの言葉の存在があったと言つていいだろう。人間はそれほど強く、言葉に依つて生きる「ロゴスの存在」なのである。

神話から文学へ

文学そのものの発生も、人間が言葉に依つて生きていくことと切り離すことはできないと思われる。人間は言葉を使うことと並行して手にした理性の力によって、万物の霊長となりえたが、その一方で、理性によつては捉え難い世界の不合理に対しても目を向けざるを得なくなつた。その最たるものは死であつたらう。日野啓三は「書くことの秘儀」の中で、人間が「死」を理解できるのは「死という現象を自分自身を含む生物の普遍的運命と考えることができる抽象的能力のためであり、その抽象化、観念化をもたらしめたものが言語だった」(注

2)と述べている。既に述べたように、人間と他の動物が使用する言語(音声信号)の間の決定的な違いは、抽象的概念を持つか否かである。人間は抽象的な概念を理解することができるようになったことで、自分を取り巻く世界の様々な事象を理解し、解き明かそうとしてきた。現在の科学が担っている役割もまさにそれだといえる。一方、科学が発達するはるか以前の人間は、そうした事象を「神の力」で説明することを試みた。そこで生まれたのが神話である。日野啓三は、どのような神話も世界の過酷な相貌の奥にある不可解な混沌の力と、そこで生きていく人間とは何かという根本的な問いへの答えになっっている、というよりは、問いがあつて答えがあるというよりは、様々な想念がなせ心の最深部をゆすめるのかと考え続ける行為が、「この世界とは何か」「人間とは何か」という問いを浮かび上がらせた、という趣旨のことを述べている。恐らく、文学のルーツもここに遡ることができよう。

世界最古の文学とされるのは、メソポタミア文明の遺跡から出土した粘土板に刻まれた『ギルガメシュ叙事詩』である。ギルガメシュは半人半神の英雄であり、その活

躍を描くこの作品は神話と文学両方の性格を持つている。そして、この世界最古の文学のテーマは、まさに先ほど述べた「死」なのである。『ギルガメシュ叙事詩』はこの問題に対して、人間はどうしても死を避けることはできない、だからせめて生きている間、「生を汲み尽くせ」という結論を提示している。四〇〇〇年以上前に編まれた世界最古の文学が、その後の世界中の文学作品が繰り返し扱う主題について、やはり繰り返し語られる結論を提示していることは極めて示唆的である。人間は神話の時代から死の必然性をはじめとする世界の不合理と言葉によって向き合い、それが神話の継承者である文学においても、様々な形で現在まで繰り返し扱われてきたのである。日野啓三は「書く」という行為について、自覚的に書くという行為は、それによって自己や世界を少しでも意識化しようとするのと、自己の深みに隠れている太古からの声をとらえることであるといったことを述べている。つまり、どの時代のどの文学も根底では「世界と人間との関係」や「人間とは何であるか」といった課題に対して、科学的証明とはまた違った答えを示すことを目的としており、それはかつて神話が果たし

てきた役割を引き継いだものなのである。

文学を生きる

話が大きくなってしまつたが、文学は人間の本質にかかわる営為であるということに主張するためには、社会的存在である人間にとつての「言葉」について考え、そして人類の精神史をさかのぼる必要があつた。一方で、文学はそれを実際に「読む」者にとつては極めて個人的なものである。そこで、ここまでの議論とは大きく視点を変え、個としての自分自身と文学の関わりについて述べてみたい。もちろんそれは、「社会の役に立つか」という問いの直接的な答えではないかも知れない。しかし、個にとつての文学を論じることは、個の集合たる人間社会にとつて文学が持つ意味を考えることにつながるのではないか。

『ギルガメシュ叙事詩』以来、文学は「人間とは何であるか」という問いと向き合うことを目指してきた。このテーマは、直接それを主題としているようにみえなくても、およそ「文学」と名の付く作品に共通するものである。私が初めてそのことを意識したのは、小学五年生の時に出会つた小野不由美の『月の影の海』を読んだ時

であった。他人に合わせて生きてきた高校生
の主人公が、ある日見知らぬ男に連れら
れて異世界に行き、そこではじめて、自分
で自分自身の生き方を決めることを迫られ
るという物語だ。主人公は何も特別な人間
ではなく、はっきり言えば醜い人間である。
しかしその醜さの向こうに、美しいとすら
いえる「人間らしさ」があった。人間をそ
の不完全さにおいてこそ魅力的に感じると
いう感覚は、文学によってしか得られなかつた
だろう。私は現実の世界で生きると共に、
時としてこの小説の世界の中を生きてい
ることがあった。文学と現実とは、それが併
存することによってお互いを健全なものに
しているのだということ、私はこの小説
で始めて経験した。これは文学の本質にか
かわる経験であったのだと思う。またこれ
とは少し違うが、詩という文学もまた私が
言葉の芸術としての文学の力について考え
る機会を与えてくれた。高校で聖歌隊に所
属する私にとって、歌は文学と同等に自分
自身の存在と切り離せないものである。何
気なく歌う詩の言葉は、それ自体がまぎれ
もない文学作品であり、「言霊」をもった
詩は歌に乗ってその書き手の心を伝えるも
のだということ、私は経験的に知っていた

る。私たちが歌う「ふるさと」の歌を聞き、
ある時祖母が大粒の涙を流した。祖母の目
の前には、東日本大震災の際に津波で跡形
もなく流され、二度と見ることできない
故郷の光景が浮かんだそう。強い力を持
った詩の言葉以外の何が、もはや存在しな
い故郷を祖母に見せることができたのだ
ろ。

もちろん、こうしたことは全て私の個人
的経験であり、それが「社会の役に立つ」
かと問われれば、なんと答えればよいかわ
からない。もし、こうした個人的経験が無
価値なものだということであれば、人間を社
会の役に立つものと立たない者に分け、役
に立たないものが排除されるのは当然と考
える強者の論理、適者生存の価値観も肯定
されてしまうだろう。歴史を紐解けば、そ
うした史実は枚挙にいとまがない。しかし、
整然と反論できなくとも、それは間違っ
ており、人間には役に立つか否かを超越した
存在価値があると答えることに、私たちの
社会の倫理的基礎があると考えたい、いや
そう信じたのである。

最後に——文学は社会の役に立つか——

ここであらためて、「文学は社会の役に

立つか」という問いについて考える。最初
に述べたように、その答えは「役に立つ」
という言葉をどのような意味で使うかによ
って変わってくる。もしそれが、いわゆる
実用性を意味するとするなら、文学は直ち
に何かの「役に立つ」ものではあるまい。
その点は、「役に立つ」学問の代名詞とい
える「科学」とは比べ物にならない。しか
し、それは文学が価値のないものであると
いうことを意味してはいない。それは、端
的に言うなら「科学」と「文学」が人間精
神の異なる領域を受け持っていることに由
来する違いなのである。

ログスの存在である人間は、言語に立脚
する抽象的思考の能力を使い、世界を理解
し、説明しようとしてきた。合理的にそれ
を行うものが自然哲学から発展した科学で
あり、その範囲を超える問題を扱うのが、
古い時代には神話であって、文学はそこか
ら生まれた。どちらも、「この世界や人間
とは何か」という問いに対して答えを出そ
うとする営みであるが、科学は個々の事象
に対する部分的証明を得意とするものであ
る一方、世界や人間の全体としてのつなが
りや本質を解き明かすことには限界があ
る。それに対し、神話やそこから生まれた

文学は、生きることの意味や人間の本質といった、科学によっては証明しえないものを説明することに適している。ログスの存在である人間が世界を説明しようとするいわば本能のような欲求を実現するための二つの手段として、本来この二者は相互補完的なものだったはずである。ところが、現代は前者が偏重される時代となつていゝ。日野啓三はこのことについて、現代においても、私たちは世界の本質を絡み合う全体において思考し表現することを、神話以上にできてはいないということを指摘し、現代の人間が現実的と信じるのは世界の中の特定の部分だけに分析と証明の論理を完結させているからで、生きるためにほかの生物の命を奪うことや、自分自身がいつか死ぬということまでできるだけ意識しないように生きていくに過ぎないと論じている。この指摘の通り、「科学」が世界の全てを説明し尽くしたわけでは当然ない。それにも関わらず、人間はいつからか、どのような事象にも説明するために科学を用いることが最善だと考え、解決できない問題と向き合うことを放棄し、それらを「考えてもどうしようもない、役に立たない」というようになってしまった。そうすることで、

私たちの社会は世界を理解するためのもう一つの重要な手段を無価値だと断じ、その先にある、互いに関連を欠いた無機質な事実だけが散在する世界に自ら入り込みつつあるのではないか。私自身は、そのような世界で生きていくことは耐え難いし、そうした社会には違和感とともに恐怖すら感じる。それは、ログスの存在として科学と文学という二つの方法で世界を理解してきたことが、もはや不可能になり、人間の人間としての在り方が脅かされるという恐怖である。そして、全てが「役に立つ」か否かで分けられ、「役に立たない」ものが排除される社会への恐怖であり、言い換えれば私たちの社会が、人間が人間らしく生きられる社会であることをやめることへの恐怖である。

最後に、「文学は社会の役に立つか」という最初の問いに答えよう。文学は理性的生き物である人間が、科学では説明しきれないことを説明するために必要とするものであり、社会が「人間の」社会であり続ける限り、人間が人間として存在するために「役に立つ」といえよう。だが、もし私たちが自ら人間であることを放棄しようとしているのなら、全く役に立たない

といえる。その場合私たちは、個の尊厳を捨て、自ら思考することをやめて、置き換え可能な歯車のように「役に立つ」人生を送ればよいということになる。「文学は社会の役に立つか」という問いへの答えは、私たちが世界を理解し、意味づけし、その中でそれぞれが自分の尊厳をもってどう生きようとするかを考えられるような、「人間の」社会を目指すのか否かによって、変わるのである。

〈注〉

(注1) 古橋信孝著『文学はなぜ必要か

日本文学&ミステリー案内』、笠

間書院、二〇一五年、二〇頁

(注2) 日野啓三著『書くことの秘儀』、

集英社、二〇〇三年、四三頁

〈参考文献〉

新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、二

〇〇八年

『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、一九八

七年

沼野充義著『世界は文学でできている』、

光文社、二〇一二年

沼野充義著『やっぱり世界は文学でできて

いる』、光文社、二〇一三年

日野啓三著『書くことの秘儀』、集英社、二〇〇三年

古橋信孝著『文学はなぜ必要か 日本文学 & ミステリー案内』、笠間書院、二〇一五年

矢島文夫訳『ギルガメシユ叙事詩』、筑摩

書房、一九九八年

吉本隆明著『定本 言語にとって美とは何か』、角川ソフィア文庫、二〇〇一年

内田樹の研究室

http://blog.tatsuru.com/2017/03/30_1305.html